

リベラル派は滅びる

高市首相への理不尽な批判に東浩紀氏

高市内閣は高い支持率にも支えられて順調な滑り出しを見せています。

国会では、これに焦る立憲などが、揚げ足取りの「追及」に終始し、ネット上では「井立憲いらぬい」のハッシュタグが溢れています。これまでに、国会質疑などに何の関心もなかったであろう人々までもが、とりわけ若い世代を中心に、断片的ではあっても国会での生のやりとりを注視しているのです。

「高市首相への罵倒は暴力」

そうした中、高市首相への忌避感からか、「女性が女性を差別している」とも言える発言が見受けられます。これらを厳しく批判しているのが批評家の東浩紀氏です。氏は「いわゆるリベラル改憲派」と言うべき人物で、高市首相とはイデオロギーは異なります。しかし、AERAの2025年11月17日号で、「こんな理不尽な批判を続けていたらリベラル派は本当に滅びる」と指摘しています。

この中で氏は、トランプ大統領が訪日した際の高市首相の言動に一部メディアや左派勢力から批判が出たことについて言及。元衆院議員で共産の池内沙織氏が、米大統領に寄り添う高市首相の姿を「現地妻」に例えたことについて「今ではほぼ使われない女性蔑視の

表現だ。権力批判に罵詈雑言はつきものとの考えもある。しかしこの10年で日本社会は大きく変わった。差別やハラスメントにみな敏感になった」と述べています。

「リベラル派は空気を読み違えている」

そして、「リベラル派の暴言は安倍政権時代に広がった。『アベ死ね』といった罵倒がメディアに溢れた。筆者は当時からその風潮に批判的だった」とした上で、高市首相について「叩き上げで成功を掴んだ一般家庭出身の女性挑戦者だ。そんな彼女を罵倒しても、現在の有権者は暴力としか感じない。リベラル派は空気を読み違えている」と指摘しています。

いわゆるフェミニストの上野千鶴子氏が「高市氏は男性に過剰同一化しており、必ずしも女性の利害を代表しない」と述べていることについても、「ついに日本でも女性総理が誕生した。それなのにあの女は本質的には男だと理屈を立て、醜い言葉で罵倒し続ける」と激しく追及しています。

「中国総領事の妄言」

対中防衛力強化の必要性を示した

高市首相の台湾有事を巡る国会答弁に対し、中国総領事館（大阪市）の薛劍駐大阪総領事が11月8日、Xへの投稿で「勝手に突っ込んできたその汚い首は一瞬の躊躇もなく切ってやるしかない。覚悟ができていないのか」と罵倒しました。

これを、単なる非礼な個人的発言として片付けるのは間違っています。高市首相は習近平主席との首脳会談で、ウイグル問題にまで言及するなど毅然とした姿勢を貫きました。薛劍総領事の投稿は、どんな発言をすれば、高市首相に追い詰められたようにも見える習近平が喜ぶかを計算した上での発言なのでしょう。

中国外務省の報道局長は13日の記者会見で、「中国側は必ず正面から痛撃を食らわす」とまで述べており、薛総領事は習近平の代弁者としての役割を果たしたと言えるかもしれません。そう考えると、我が国が、より緊密に米国と連

携して、「台湾有事」すなわち「日本有事」への抑止力強化を急がなければならない理由が見えてきます。

国会でこそ非難決議を！

自民党は11日、「日本国及び日本国民に対する侮辱である」などとする非難決議を行いました。政府に対し、中国側の問題解決への努力がなされない場合は総領事を外交用語の「ペルソナ・ノン・グラータ」（好ましくない人物）として国外退去にすることも求めています。

しかし、今回の決議は本来、国会こそが与野党全会一致でやるべきはずのものであります。高市首相の答弁は「台湾有事は日本有事だから」、「最悪のケースはこうなる」という常識的なことを言ったに過ぎないので、憲法に立憲などは中国に忖度し、先回りするかのように高市首相に「発言撤回」を求めています。ますます国民の信頼を失うだけです。

